

鶏鳴と禍福 — 伝承の成立過程 —

三 浦 百 合 子

一、はじめに

鶏は、世界各地の伝説に登場する。日本もその例外ではなく、鶏が登場する伝説は枚挙に暇がない。鶏が昔から家畜として人に飼われ、人とともに暮らしてきたからなのだろう。

日本においてまとまって見られるのは、金鶏伝説と呼ばれる伝説である。これについては中山太郎や大藤時彦が詳しく論じている（注1）が、その多くは石の中や上、塚、淵などで鶏の声がするというもので、それに付随して様々な言い伝えがされている。ただ鳴き声が聞えるというものから、鳴き声を聞くと幸福になる、その反対に死ぬなどの災いが降りかかるとするものまである。

同じ鶏の声から、ある伝承では禍が、またある伝承では福が生ずるという両面が見られる背景には何があるのだろうか。従来、この点に注目した研究はあまりされていないのが現状であるが、大藤時彦はこれについて元旦に鶏が鳴く伝承の多いことを指摘した上で、鶏が人に様々なことを「知らせる」という性質を持つていたことを挙げ、「元旦の鶏声によって年の吉凶を卜する習慣があった」からであるという結論を導き出している（注2）。

鶏が様々な物事を人間に知らせる機能を持った動物であること

は数々の先行研究によって明らかになっている通りである。また鶏と卜占の関わりで言えば、闘鶏が古くから吉凶を判じる手段として用いられていたことは歴史的資料からものはつきりしている。また神社などで飼われ、あるときは神への捧げ物として生贄にされ、あるいは門に磔にされるなどの伝承も残っており、鶏が呪術的な意味を持った動物であったことにも疑いはない。

しかしはたして、鶏鳴が最初から吉凶を判ずるものであったといえるのか。鶏鳴に伴う禍福両方の伝承が残ることについて、もっと違った考え方はできないのか。本論稿では金鶏伝説に限らず、鶏の鳴き声とそれに伴う禍福を語る伝承に焦点を当て、残された伝承からその手がかりを探っていきたい。

二、鶏鳴と禍福に関する伝承

では、実際に鶏の鳴き声に関する伝承にはどのようなものがあるのか見ていくことにしよう。

はじめに、鶏の鳴き声を聞くと幸福になるという伝承について見てみたい。以下に、その伝承の例を挙げる。（注3）

① 鶏石 鳥取県岩美郡志保美村中村

ここに鶏岩といふのがあつて、この中に金鶏がをり、その鳴声をきくと福が来るといふ。昔はこの岩の側に御来屋大明神といふ社があつて、その頃は毎年一度づつ猿が詣りに来たといふ。

(岩美郡史)

『日本伝説名彙』

② 丹羽郡池野村入鹿池畔のある坂で、正月一日の朝に金の鶏が鳴くそうである。その声を聞いたものはその年一年は大変幸福であるという。『愛知県伝説集』

(大藤時彦「金鶏伝説」)

③ 金鶏山 岐阜県山県郡

大桑村の城山のことをいふ。天正一六年土岐頼芸、齋藤道三に攻落されて、家宝の鶏を井中に捨て去つた。その金鶏、元旦には出て三声鳴く。これを聴けば長命を保つとて村民この朝は早起きするといふ。(山県郡誌)

『日本伝説名彙』

④ 鶏岡 広島県世羅郡三川村川尻

長者ヶ原といふ所にある。大晦日の真夜中に鶏鳴をなすといひ、この声を聞く者は長者になると伝へてゐる。(世羅郡誌)

『日本伝説名彙』

⑤ 朝日長者 三重県一志郡榑原寺野

長光寺の辺りに、朝日輝き夕日照り映える御土カボ(又はアブラビシヤコ)の木の下に、黄金の鶏一番ひ、黄金の縄一條が埋めてあり、この村が窮乏に至つたとき、鶏が鳴くので其処を掘れば救はれるといふ。(三重県伝説集)

『日本伝説名彙』

これらの伝承の特徴としては、大藤が指摘していたように鶏が鳴く時について元旦あるいは大晦日という時間設定が散見されることと、長者伝説との結びつきがかなり強いことが指摘できる。

①は最も単純な形で、元旦などの時間の設定はなく、鶏鳴を聞く福が来るといふ伝承になっている。

②③は元旦に、④は大晦日に鶏が鳴き、その声を聞くと幸福になるという。なかでも、③④には長者伝説との結びつきが認められる。③は城山に鶏を埋めた人物が明確に伝承されており、①②とは異なつてなぜそこで鶏が鳴くかという理由が示されている。

④になると「長者ヶ原」という地名が残るだけで、そこがもと長者の屋敷であつたというような伝承は消えてしまつてゐるが、やはりもとは③のように長者が家宝を埋めたというような伝承があつたと見ることができよう。⑤では宝が埋められていることは語られるが、誰が埋めたかということについては言及がない。この伝承の場合、鶏が鳴く場所を掘れば宝が見つかり、村が窮乏から救われるという。この場合③④の鶏鳴を聞くと幸福になるという流れの間に、鶏の鳴いた場所を掘るという行為が加わる。そして、鶏の声が聞えた場所実際に黄金の鶏と縄が埋めてあり、それによつて富貴になるという形になっている。①④の伝承に比して実用性を帯びたものになっている。

詳細な検討を加えれば様々な相違点が見出されるものの、基本となる構造は「鶏鳴を聞くと幸福になる」という点に集約できる。

次に、鶏鳴を聞くと不幸になるという伝承について見てみよう。以下はその伝承の例である。

⑥紀州の高野山の大門の谷に鶏ノ淵と云ふがある。土人伝ふこゝで金鶏の声を聞くと必ず夭亡または即死すると。同山は開基以来之養鶏が禁じられてゐた(紀伊統風土記卷五十八)。

(中山太郎「金鶏塚」)

⑦大和国宇陀郡御杖村大字桃俣に鏡山と云ふがある。里人伝へて此の山に石棺あつて黄色の鶏が収めてある。正月元旦その鳴く声を聞いた人は死ぬとのことである(奈良県宇陀郡史料)。

(中山太郎「金鶏塚」)

⑧鶏淵 島根県美濃郡道川村

ここで鶏鳴を聞くと洪水があるとして人が恐れてゐる。(島根県伝説集)

(『日本伝説名彙』)

⑨金塚 奈良県添上郡

東山村と山辺郡針ヶ別所と豊原村の境にコーノ山がある。神野山または髪生山と書く。その山上にコガネ塚があり、黄金の鶏が埋めてあつて元旦に三声鳴き、また国に変事がある前にも鳴くといひ、日清日露の両役の前にも鳴いたといふ。(大和の伝説)

(『日本伝説名彙』)

⑥⑦は、ともに鶏鳴を聞くと死ぬといった伝承である。鶏鳴を聞くと不幸になるという伝承の中では、これらと同様それが死に結びつくというものが多い。⑧は、淵で聞える鶏鳴が洪水の前触れであるという伝承であり、⑨は国に変事があるときは鶏鳴がそれを予告するという。

⑥⑦と⑧⑨の間には大きな構造の相違がある。⑥⑦が鶏鳴を聞いた人個人に不幸をもたらすものとしてとらえているのに対し、⑧⑨は鶏鳴を村または国に起こる凶事の予兆としてとらえているのである。ここには、鶏鳴とそれに伴う禍福について考えるために必要な大きな鍵があるのだが、このことについては福をもたらすという伝承についても含めた上で、後に詳しく考察していくことにしたい。

三、禍福の分岐点

これまで実際に伝承を挙げながら見てきたように、鶏鳴を聞くという一つの行為について、それを聞くと幸福になるとする伝承と、不幸になるとする伝承がある。このような一見矛盾する伝承が生まれた理由は何であるのだろうか。ここではまず、鶏の声を持つ力について考えることにしよう。

鶏の声についての伝承が多いことは、それだけ人間にとって鶏の声が重要であつたことを示している。古来、鶏は夜明けを告げる鳥として珍重されてきた。野本寛一は「鶏の呪力」(注4)の中で、「夜を終結させ、朝を呼ぶ。即ち太陽を呼ぶ鳥」とされた鶏が、やがて夜や闇や「闇の時間に跋扈する諸悪」や「神の時間」を終結させる呪術的な力を持つと考えられるようになっていた、と述べている。夜を終結させる鶏の声は、闇夜に登場する異界に住む者たちの存在を信じていた人々にとつてありがたいものであつたはずである。人々に尊ばれた鶏鳴が、幸福をもたらすものであると言われることには何ら違和感がない。

その一方で、鶏が夜明け以外の時に鳴くことは忌まれていた。

夜明けに鳴く鶏がほかの時に鳴くことは、異常事態であると考えられたからであろう。また、夜明けを知らせるはずの鶏が宵に鳴けば、混乱が生じる。その例として、出雲の美保神社の八重事代主神の話（注5）を挙げておこう。

八重事代主神は、毎晩海を渡って対岸の女神の所に通っていた。

ある晩、鶏が真夜中に鳴き、夜が明けたと思った八重事代主神は慌てて舟に乗ったために、櫂を岸に置き忘れてきてしまう。しかたがなく手で水を掻いたところ、鰐に手をかまれてしまった。以降、この神は鶏を憎むようになったため、美保関では鶏を飼わない、という。

また、鶏を夜鳴かせることで悪事を働くというような伝承もある。

⑩昔、旅人を泊めて朝暗いうちに出発させ、山道で待ち伏せして金を奪い、儲けている家があった。旅人を家に泊め、夜に鶏の止まり木の竹の筒に湯を入れ、鶏の足を温める。すると、鶏は夜が明けたと思って鳴く。鶏の声で目を覚まし、朝だと勘違いした旅人は夜暗いうちに出発する。それを追いかけていって、追いはぎをしたり殺したりして金を奪ったということだ。

『紀伊半島の昔話』『追はぎと鶏』より抜粋・編集

この伝承では、故意に鶏を夜に鳴かせて旅人を混乱させ、夜のうちに立去らせている。こういった旅人・六部の持つ金を奪う話と鶏との関連はほかにも見ることができ、別に検討が必要な問題であると思われるが、ここではひとまずそれについての考察は省くこととし、鶏鳴が夜昼の境目に混乱を生じさせるという点に注

目しておく。「時間の管理者」であるはずの鶏が夜明け前に鳴けば、男女の逢瀬は中断させられ、人は闇の世界に無防備なまま入っていくことになるのだ。

③に挙げた伝承のように大晦日の真夜中の鶏鳴を聞くとよいとする伝承もあるが、これは大晦日という年越しの晩を特別なものとしたからであろう。もとは夜明けの鶏鳴を福、それ以外の鶏鳴を禍とした意識が強かったと思われる。その結果として二種類の伝承が生まれたのではないか。そして、伝承の過程で夜明けや真夜中といった時間の意識が薄れ、鶏の声を聞くと福がある、または禍があると言われるようになったのではないだろうか。鶏の声にはもともと尊ばれるものもあり、忌まれるものもあったのである。

四、鶏鳴の「知らせる」機能

もう一つ、別の方向からこの鶏鳴と禍福の問題についてのアプローチを試みたい。ここでもやはり、鶏の夜明けを告げるという特質に注目する。

鶏について夜明けを告げる声が重要視されていたということについては前に述べた。また初めにも少し述べたが、夜明けを知らせる鶏は、様々なことを知らせる力を持っていると信じられていたようである。実際に例を挙げてみよう。

⑪昔々これもある所にトトとガガと、娘の嫁に行く支度を買ひに町へ出で行くとして戸を鎖し、誰が来ても明るなよ、はアと答へたれば出でたり。昼の頃ヤマハハ来たりて娘を取りて食ひ、娘

の皮をかぶり娘になりてをる。夕方二人の親帰りて、おりこひめこゐたかと門の口より呼べば、あ、あたます、早かつたなしと答へ、二親は買ひ来たりしいろいろの支度の物を見せて娘の悦ぶ顔を見たり。次の日の夜の明けたる時、家の鶏羽ばたきして、糠屋の隅ツ子見ろちや、けけると鳴く。はて常に変はりたる鶏の鳴きやうかなと二親は思ひたり。それより花嫁を送り出すとてヤマハハのおりこひめこを馬に載せ、今や引き出さんとするときまた鶏鳴く。その声は、おりこひめこを載せなあでヤマハハのせた、けけると聞こゆ。これを繰り返して歌ひしかば、二親も始めて心付き、ヤマハハを馬より引き下して殺したり。それより糠屋の隅に行きしに娘の骨あまたありたり。

『遠野物語』一一七

⑫ 鶏と猫

ある金持の家で、放し飼いにしていた鶏が石の上にながって家の中に向かつて歌うことが三日くらい続いた。家の人は不思議に思つていろいろ調べたがわからなかつた。四日目の夜、飼ひ猫がひもをくわえてその人の寝ている上を何回も飛び越えた。おかしいと思つて猫の後をつけていくと、石の下に人が入るくらい大きな穴が掘つてあつた。猫は殺した。だから猫は長く飼わないものだ。

『奄美諸島の昔話』より抜粋

⑪はヤマハハの仕業について鶏が告げる話、⑫は猫の悪事を鶏が見抜いて主人に知らせるといふ話である。三例とも、鶏が人間の身に何かが起きたことあるいは起きようとしていることを告げる話である。鶏には、その声で人間に危険を「知らせる」という

役割があつたのだ。

ここに、「夜明けを告げる」という鶏の性質からもう一歩進んで、人間にものごとを「知らせる」、さらには「予言する」というところまで鶏の役割が拡大されていった過程を見ることができないか。前述した三例は、何れも凶事を知らせるものだが、鶏鳴が聞えた場所を掘つたら金が見つかったなどの伝承もあるのであり、これは金山との関連が認められるが、よいことを予言する力も持っていたといつてよい。

そこで、二で挙げた①～⑦までの鶏の鳴き声を聞くと禍福がある、とする伝承の前段階として、今挙げた鶏の声が人に何かを「知らせる」とする⑪⑫の伝承を位置づけてみたい。⑧⑨は両者の間に位置する伝承であると考える。

まず、鶏が人に様々なことを知らせるといふ⑪、⑫のような伝承があつたと考える。様々なことの中には、当然よい事と悪いことがあるのであつて、鶏はその両方を鳴き声によつて人に知らせた。ここから、鶏鳴を何かの予兆としてとらえる伝承が生まれる。それが⑧⑨のような伝承である。そこからさらに発展して、鶏鳴を聞くと幸福になる、あるいは不幸になるという伝承が生じる。これが①～⑦にあげたような伝承である。

はじめから、鶏鳴によつて禍福がもたらされるといふ伝承があつたのではなく、その前段階として、禍福を知らせる存在としての鶏鳴があつたと考えた方が自然なのである。しかしいつしか、その前段階の伝承の方が薄れ、鶏の声が禍福の予兆であるとする伝承が各地に残るようになったのではないか。鶏が誰かに何かを知らせたといふ昔の話より、自らに利害が及ぶといふ類の伝承の方が、人々の印象に深く刻まれ、残つていったと考えられる。一

方で、その前段階でとどまっているのが、⑪や⑫のような伝承なのである。

五、禍福両方を告げる鶏鳴

しかしここで問題となってくるのは、鶏鳴が禍福の一方ではなく、その両方を告げるとする伝承があることである。次に例を挙げておこう。

⑬秋田県では鶏が真夜中に鳴くのは死人の出る兆とか、死霊が来たからだという。宵鳴の鶏の三声（または四声）は吉、八声は火の用心といい、夜に鶏の口真似をすると火事になるといわれている。また鶏が高い所に上って鳴けば雨が降るともい一般に宵鶏の鳴くのは不吉とされているが、高所に上って鳴くのは吉とも凶ともいわれている。

（大藤時彦「金鶏伝説」）

⑭金鶏の鳴き声（岡山県倉敷市）

室町時代、明の船が阿知の海（現在の倉敷市周辺）で海賊に襲われ、宝物とともに沈んだ。その後、阿知の海は干拓されて陸になった。いつのころからか、鶴形山と羽島山の間から、細雨の降る夜、鶏の鳴く声が聞えるようになった。沈没した船に積んであった金の鶏が鳴いているという。鶏の鳴き声は元旦の未明に聞えるともいう。鶏は三声鳴く。三声とも聞くと大金持ちになるが、一声二声だけでは災いが起こる。鶏の鳴き声のする所を掘り当てれば財宝が埋まっているというが、だれも発見したものはいいない。

『おかやま伝説紀行』

⑬⑭はともに、鶏鳴の数によって禍福が異なっている。これについてはどうに考えればいいのか。はじめに挙げた大藤の論稿では、この伝承が鶏鳴が吉凶の判断に用いられていたということの根拠として挙げられているのだ。

⑬や⑭が、鶏鳴の卜占の側面を語る伝承であることに異論はない。しかし、今まで述べてきた伝承の発展過程にこれらを位置づけるとすると最後になるのである。鶏鳴を吉兆とし、あるいは凶兆とした伝承が交わることによって、鶏鳴が吉凶を判ずるものと考えられるようになり、⑬⑭のような伝承が成立したのであって、⑬や⑭のような伝承から①⑤と⑥⑦のような伝承に分化していったわけではないだろう。それは、⑧⑨⑩のような伝承との関係から考えても明らかである。

鶏はその声によって夜明けを告げるというところから、人に何かを知らせることにつながり、それが禍福を知らせることになり、やがて鶏の声を聞くと福が来る、あるいは禍が来ると信じられるようになった。またこの根幹には、夜明けの鶏鳴が喜ばしいものとされる一方で、それ以外の時間の鶏鳴が不吉なものとして忌避されていたことが深く関わっている。そして、そのような伝承の関連の中で、鶏鳴の聞えた数によって、禍福を判断するような伝承が生まれていくことになったのである。

六、おわりに

鶏については、それに関わる伝承が多い分、様々な性質や役割が付与され、それぞれの役割の結節点にまた新たな役割が生じて

くるといふ連鎖が起こっているように感じられる。今回は鶏鳴とそれに関する禍福の問題に絞って取り上げたが、この問題についてもほかの鶏の伝説と閉じた関係にはあらず、あらゆるものと関わりながら成立してきた伝承であると考えられる。そのことを考えると、今回は鶏鳴とその禍福についての一端を捕らえることができたとしても、それはほんの一部分であると言える。今回詳しく扱うことができなかった金山などの鉾山との関わりや、長者伝説との関係、大晦日や元旦に鶏鳴が聞えるとする伝承が多いことは、一日の始まりを告げる鶏が一年の始まりを告げる機能を持ち、それが重視されていたからであろうと考えられる。これについても詳しい検討を重ねれば鶏鳴について新しく判明することがあるだろう。

さらに、鶏に限らず鳥という大きな枠組みで見ても、鳥自体に境界的な性質があるのであって、鶏のことを考える前に鳥の性質について考えることも必要なのであろう。

また、鶏石の話で言えば、変事の前に石が鳴動するというような伝説は各地にある。鶏の力だけだなく石との関連についても考えなければ、この伝承の本当の意味は読みとることができないのである。

文中に提示した六部と鶏の関係についても同じことが言える。この論稿においては、明確になったことよりも課題として残ったことのほうが多い。

普通の家で鶏が飼われなくなった現在、鶏についてのこうした伝承はそのほかの多くの伝承と同じ様に消えていく方向にあるだろう。鶏がいるといえは学校の飼育小屋か養鶏場くらいであり、集落に鶏鳴が響き渡るということはほとんどないといっている。

それに伴ってか、金鶏伝説についての研究も近年はされていないようである。

そのような中であって今回鶏鳴と禍福の問題を取り上げたのは、今は茫漠としてしまった鶏と人との関係についても一度考えてみたかったからである。鶏は、卵を産み、祝事の際には肉を提供する単なる家畜としてではなく、そのほかにも様々な役割を担い、人々にとって様々な意味を持つ特別な動物として存在していたということを示すことができたいと思う。

注

(1) 中山太郎「金鶏塚」(『郷土趣味』第四卷第七号 一九三三年)、大藤時彦「金鶏伝説」(『国学院雑誌』第七三卷第一号 一九七二年)。

(2) 前掲論文。

(3) 以下、引用文中の旧漢字は全て常用漢字に改めた。

(4) 野本寛一「鶏の呪力―時間・空間をめぐる構造―」(『漢文学会々報』第三十一輯 國學院大學漢文学会 一九八六年)。

(5) この伝承については、折口信夫「鶏鳴と神楽と」(『やまと新聞』一九二〇年一月) など、鶏について論じたいくつかの論文で言及されている。

参考文献

柳田國男著『遠野物語』増補版 郷土研究社 一九三五年

- 日本放送協会編『日本伝説名集』 日本放送出版協会 一九五〇年
田代英勝編『奄美諸島の昔話』日本の昔話7 日本放送出版協会 一九七四年
京都女子大学説話文学研究会編『紀伊半島の昔話』日本の昔話第13
日本放送出版協会 一九七五年
諏訪春雄「鶏の血」(『国語国文論集』第二十号 学習院女子短期大学
国語国文学会 一九九一年)
柳田國男「山島民譚集」(『柳田國男全集』二 筑摩書房 一九九七年)
高橋昌明「鶏と雷公(頼光)」(小松和彦編『境界』 怪異の民俗学8
河出書房新社 二〇〇一年)
立石憲利著『おかやま伝説紀行』 吉備人出版 二〇〇六年

(みうら・ゆりこ／東京学芸大学大学院修士課程)